

● 小谷野君が、また加えてきた。

(4/14-2)

＜続きである。「理解できないのだ」と言われてしまえば、
そうか理解できないのか、と言うほかないのだが、西鶴や
近松、芭蕉を受容したのが町人だ、というのであれば、西
洋では身分について鈴木氏はどう考えているのだろうか。
郷紳というようなものがあって、そういう階層が通俗小説
を読んでいたのである。＞

「理解できない」というのは、この場合、「説明になって
いないよ」「論理が通らない」という意味だということは、
前後を読めばわかるはずですが。

「郷紳層」というべきでは。女性の方が多かったはず。

＜鈴木氏が、自分がいかに西洋の文学を、原語で勉強した
かということ述べているのだが、私は全然語学は苦手だ
ある。しかも私が言っているのは、鈴木氏が、西洋の通俗
小説についてどの程度知っているのか、ということで、倉
田信子『フランス・バロック小説の世界』とか、玉田佳子
『偽装する女性作家』といった、日本人が書いた本のこと
を言っているのだ。あるいは、明治期の新聞小説とかであ
る。＞

そんなことが尋ねられているとは読みとれませんでした。
小谷野君があげている本は読んでいません。外国の「通俗
小説」というのは、「当代風俗小説」のことか。それとも娯
楽的要素の大きな小説という意味のことか。小谷野君は、
いったい何がしたいのか。

西洋にも「前近代」に娯楽読み物はあったこと、そして、
それを「大衆文学」と呼びたいということか。どうぞ、ご
自由に。

わたしの方は、それらが、いつから、どのようなカテゴ

リーと形態で、そして、どのように流通していたのか、たとえば 18 世紀への転換期で、日本と比較してみたとき、何が見えるのか、ということをお問うているのだが。

<それはいいとして、①近代になって、再編があったというのは、それは当然のことである。別に誰もそれを否定してはいない。②すると鈴木氏は、西洋には民衆文学はあったが大衆文学はなかった、というのであろうか。③私だって、大正末から昭和初にかけて、「大衆文学」というのが、時代小説をさす語であったことくらい知っている。白井喬二が菊池寛を排除したというのは知らないが、④芥川賞と直木賞の制定に久米正雄も与ったことは白井の自伝『さらば富士に立つ影』を見たら分かる。>

① その再編がきちんと誰も分析できていなかった。せいぜい新旧交代のようにしかとらえられてこなかった。それが、いかになされていたかを突っ込んで分析してみたら、これまでいわれてきた図式が無効だということがはっきりした。ということがわたしの議論の肝心な点なのですが。

② そもそも”mass”（大衆）を、わたしは 20 世紀の社会現象、階級を超えた概念として使っているのですがね。

③ 当時の「大衆文学」は、狭義は時代小説、広義は、プラス「探偵小説」だったのですよ。当代の恋愛ものなどは「大衆文学」のカテゴリーに入っていなかった、ということを確認してください。当時の雑誌、『現代大衆文学全集』の編成などからはっきりしているのです。

④ これをいうことに何の意味があるのですか。やはり久米の用語法が働いているとかいいたいのですか。

<① それに鈴木氏の言い方だと、直木賞受賞作は時代小説で

なければならぬことになるが、川口松太郎は時代小説であろうか。それと、前のほうで、SFは大衆小説だから直木賞をとれなかった、とあるのはどういう意味だろう。単に村上元三がSF嫌いだったからではないのか。>

① 鈴木の言い方だと、どうしてそうなるのか。人の言っていることを勝手に自分の頭の中でつくりかえないでほしい。1935年ころ、「大衆小説」の編成が変わった。「通俗小説」も入れるようになったと書いているだろうに。

それは直木賞が主たる要因ではない。が、川口松太郎が直木賞を受賞したことも、その定着に働いたとは思ふ。川口が直木とプラトン社で働いていたことも受賞には働いただろうが。

<自分の本を読め読めと言われるので、私も、『私小説のすすめ』とか『リアリズムの擁護』とかは、読んでもらいたいと思う。しかしよく「思いつき」と言われるが、なんで思いつきでなどあるものか。

ま、いずれにせよ、まだ本を入手していない。それが届いて精読すれば分かるのだろう。>

『私小説のすすめ』『リアリズムの擁護』を読むと何がわかるのですか、簡単に教えてください。わたしの研究に役立つのなら読みます。